

提出日 平成 26 年 3 月 27 日

平成25年度総合文化研究所研究助成報告書

研究の種類 (該当に○)	海外共同 ・ 共同研究 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 個人研究	
研究代表者氏名 所属職名	村井華代 文芸学部 准教授	
研究課題名	現代イスラエル演劇の展望	
研究分担者氏名	所属職名	役割分担
研究期間	平成 25 年 4 月 1 日 ～ 平成 26 年 3 月 31 日	
海外共同研究を実施することになった経緯 (海外共同のみ)		
研究発表(印刷中も含む)雑誌および図書 【口頭発表】 <ul style="list-style-type: none">● 2013 年度 10 月日本演劇学会秋の研究集会 (2013 年 10 月 13 日) 於：椋山女学園大学 「反ドラマをめぐる試論 ——大江・サイド・イスラエル」● 2013 年度日本ユダヤ学会第 10 回学術大会 (2013 年 10 月 26 日) 於：早稲田大学 「「見えざるもの」のあらわれ ——S. アンスキ『ディブック』における<ユダヤ的>舞台表象の逆説」● 2013 年度西洋比較演劇研究会 1 月例会 (2014 年 1 月 11 日) 於：慶應義塾大学 「S. アンスキ『ディブック』とユダヤ演劇の近代」 【論文】 <ul style="list-style-type: none">● 共立女子大学・共立女子短期大学総合文化研究所紀要第 20 号 (2014) 「S. アンスキ『ディブック』とユダヤ演劇の近代」		

研究実績の概要

平成 24 年度総合文化研究所助成による研究「ユダヤ教における演劇の理念」を継続しつつ、本年度は現代イスラエルの劇場の現実に視野を広げ、ユダヤ・イスラエル演劇を総合的に把握することに主眼を置いた。その中で、イディッシュ語演劇、そして現代のイスラエルを考える際の最も重要な要件であるパレスチナ問題との具体的なリンクを構築することができた。演劇の学際性を生かす上で、今後の研究の道筋が拓けたと考えている。

今年度の実績は、三つの口頭発表、一本の論文においてまとめられる。論文完成後に、テルアビブでの観劇、さらにパレスチナ・ヘブロンに劇団訪問を加えているが、これについては今後の展開へのステップとして位置づけておきたい。

10 月に行われた日本演劇学会秋の研究集会（於：椋山女学園大学）における口頭発表「反ドラマをめぐる試論 ——大江・サイド・イスラエル」では、ホロコースト記念館「ヤド・ヴァシェム」等、現代イスラエルの歴史表象におけるアリストテレス的ドラマ性と、エドワード・サイドによるその批判を取り上げた。歴史をドラマとして立ち上げることの危険性を示唆しつつ、それを積極的に導入しているイスラエルの方法論によって、演劇そのものではなく、現実世界の演劇性批判を行ったものである。質問者からは、ドラマレベルにおいて固定された歴史がパフォーマンスレベルにおいて解体される可能性を指摘する意見があったが、ここでは上演に言及する時間はなかったので、今後の発表で扱ってゆく問題としたい。

同じく 10 月、日本ユダヤ学会第 10 回学術大会では、「見えざるもの」のあらわれ ——S. アンスキ『ディブク』における<ユダヤ的>舞台表象の逆説」と題して、昨年度より継続している『ディブク』研究に関して最初の発表を行った。ここでは S. アンスキ（1863-1920）の戯曲『ディブク』が持つ身体的逆説について論じた。死者の見えない靈魂をいかにして舞台に現すかという問題について、例えば幽霊役の俳優が登場するギリシャ・ローマ/ルネサンス劇的伝統と異なり、この戯曲では死者の霊がそれ自体は不可視のまま、生者の身体的反応を介して明瞭な身体的存在感を獲得する。西洋近代のリアリズムとユダヤ的な虚像禁忌の結実としてのこうした方法論は、ヨーロッパの科学合理主義の観点からは幽霊や憑依などをオカルト的に扱う神秘主義劇というレッテルを貼られがちであったが、アンスキ自身言うように、『ディブク』は「リアリズム」劇である。発表では、さらにさまざまな見えない身体の開示を論じた。

翌 1 月に行った西洋比較演劇研究会では、そのアンスキ自身の生涯を軸に、『ディブク』の示す近代精神について論じた。アンスキは閉鎖的なユダヤ社会の言語として卑しめられたイディッシュ語を話すユダヤ人家庭に生まれ、自らの古いユダヤ的アイデンティティを嫌い、ロシア語で作品を著すロシアのジャーナリストとなる。が、パリやジュネーブで社会主義革命運動の中で、徐々にユダヤ人のために積極的にイディッシュ語で作品を書くようになり、第一次世界大戦前後からはひたすらユダヤ人救済に奔走する人生を送る。ユダヤの西洋的近代化＝非ユダヤ化の志向と、ユダヤ性への絶対回帰を西洋的理念において肯定するというアンビバレンツを持つアンスキ自身を反映するかのようになり、『ディブク』の主人公たちは、伝統的ユダヤ社会を理念的に否定することなく、それとの対決に勝利する。彼らは、メロドラマ的な筋立てに隠されているが、むしろイプセン的な近代的個人として構築されているのである。

そのような彼が晩年に書いた『ディブック』は、その数奇な成立過程から、イディッシュ語、ヘブライ語、ロシア語のテキストを持っている。そのうち、ヘブライ語のテキストは、イスラエルの国民的詩人とされる H. N. ビアリクが翻訳し、これを初演したモスクワのハビマ劇団は現在イスラエルの国立劇場であり、『ディブック』はその記念碑と見なされている。聖書の言語であるヘブライ語の日常言語としての再生は、文化的シオニズム運動の中核をなしたが、それを舞台言語とすることで、ユダヤ人は実在しなかった「ヘブライ語を話す伝統的ユダヤ人」像を創造し、演じることとなった。その発端となった『ディブック』の後世への影響は、結局初演を見ることなく没したアンスキが想像しえないほどに大きな影響を残すことになる。

共立女子大学・共立女子短期大学総合文化研究所紀要第 20 号に掲載されている「S. アンスキ『ディブック』とユダヤ演劇の近代」は、アンスキの生涯と『ディブック』成立過程をまとめたものである。日本ではほとんど知られることがないが、ディアスポラのイディッシュ語演劇、シオニズム的ヘブライ語演劇のまさに分岐点にあった劇作家として、まさに今日再考すべき作家である。

なお 2014 年 3 月、テルアビブにあるゲシエル劇場で根本から再構築された新作『ディブック』の舞台を観劇した。ゲシエルは、ソヴィエト崩壊後にイスラエルに移住したロシア系ユダヤ人俳優たちが設立した移民劇場で、いわば、ハビマがモスクワで旗揚げされてテルアビブに定住したというルートを想起させる存在である。言うまでもなくそのことに対する劇場側の意識が前面に出た舞台で、ソヴィエト崩壊に伴う資料開示を受け、ここ 20 年ほどの間に英語圏で出された『ディブック』文献の内容を色濃く反映させた内容になっていた。今回の一連の『ディブック』研究が時宜を得たものであったことを強く感じた。